

# 除染に取り組む農家撮影

映画監督が見た

## 被災地

①

2011年3月11日、東日本大震災が発生。その直後、東京電力福島第一原発事故が起きた。09年に耕作放棄田の再生に取り組む様子を取材した福島県天栄村のことが気になった。旧知の役場職員に電話し、村へ向かった。

原発から約70キロの村の田畑にも放射能汚染が広がっていた。地元の農家グループ「天栄米栽培研究会」は、その月のうちに、国や県に頼らず、自力で除染することを決めた。

「天栄村は、ぱっと見ただけでは、自分が住んでいる埼玉県と変わらない風景だった。だから、

### 原村政樹さん 55



当時の報道では、ほとんど取り上げられなかった。でも、そんな営みの中で、大きな苦しみを持っていった。これは、僕が撮影しなくてはいけないと思った」  
地元農家や役場に、放射能に立ち向かえる専門知識はない。インターネットで情報を得たり、専門家にアドバイスを求めたりして、セシウムを吸着するとされる鉱物「ゼオライト」や、

青色顔料「プルシアンブルー」を散布するなどした。

「最初は、単純に記録を残そうと考えていたが、米や野菜の放射能をゼロにする取り組みは、歴史に残る営みだと感じた。その年の夏には、質の高い映画にしようと思った」  
試行錯誤しながら稲作を続け、放射能測定で「未検出」となった。だが、買い手がつかない

い。役場職員らは東京まで足を運び、講演会を開き、消費者に直接安全を訴えた。理解は徐々に広がっている。今回、村の挑戦を「天に栄える村」という作品として公開した。

「映画では、除染のメカニズムなどについては、あえて詳しく紹介しなかった。農家の人の生活や息づかいを伝えたい。こんな過酷な事故に直面しても、『ここまで頑張るか』という姿を見てほしい」

\*

震災後、多くのドキュメンタリー映画監督が被災地に入り、復興の様子を撮り続けた。山形市で1〜3日に開かれた上映会「ともにある Cinema With US 忘れないために1」に出品した4人の監督に思いを聞いた。

映画に関する問い合わせは、桜映画社(03・3478・6110)へ。